

令和4年度

歴史・文化探訪の会（報告）

厳寒の候、皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。

さて、昨年11月26日（土）に実施しました第33回探訪会「関ヶ原古戦場記念館と古戦場を巡る」について、ご報告をさせていただきます。

当日は寒さもそれほどではなく、穏やかな探訪会日和となりました。探訪会を振り返ってみます。

10時30分頃予定の参加者8名全員が関ヶ原古戦場記念館に集合し探訪会を開始した。この岐阜関ヶ原古戦場記念館は、家康最後の陣地跡に2年ほど前に新築され、館長は静岡大学名誉教授小和田哲男氏である。

まず「グラウンド・ヴィジョン」見学から始めることになっていたが、少し待ち時間があつたので、館内で記念撮影やトイレ等を済ませ、11時頃入場した。「グラウンド・ヴィジョン（床面にスクリーンを設置）」では映像で東西陣営を俯瞰し、関ヶ原の戦いにいたるまでの流れとその規模の大きさを実感できた。

続いて隣の「シアター」に入り、縦4.5m、横13mのオバル（楕円）型スクリーンで両軍の激突の再現映像を、風や振動・光と音の演出で見学、まるで戦いの現場に迷い込んだかのようなバーチャル体験をした。内容は次のようなものであった。

「今から400年以上前、ここ関ヶ原を舞台に天下分け目の戦いが繰り広げられた。石田三成ら西軍は総勢10万、徳川家康ら東軍は総勢7万が関ヶ原に陣を構えた。先に石田勢が陣を構えた（鶴翼の陣、（石田三成の陣は笹尾山））ことから、あとから関ヶ原に到着した徳川勢は、不利な配置（家康の陣は桃配山）となっていた。

戦いは慶長5年9月15日（1600年10月21日）午前8時頃に始まった。濃霧の中で両軍対峙していたが、霧が晴れて来た頃、福島正則の部隊が、宇喜多秀家隊に鉄砲を撃ち掛けたことで火蓋が切られた。地形的有利が働いて、東軍は少し押されていた。しかし、東軍の黒田長政らが事前に西軍の小早川秀秋らを調略していて、昼過ぎ頃小早川秀秋は西軍を裏切って隣の大谷吉継らの陣に突撃を開始した。そして調略を受けていた脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保、吉川広家らも西軍を裏切って、東軍として戦いに参加した。

こうして、西軍は総崩れとなり、双方合わせて6000～8000人の戦死者を出した関ヶ原の戦いはわずか6時間ほどで終わり、徳川家康勢の大勝利となった。」

シアターを出て、各自2階展示室（当時の武器や武具、古文書・地図などの歴史資料が展示）等を見学し、12時30頃5階の展望室に再集合、そこで関ヶ原史跡ガイドの山村健一さんと合流し、ガイドから関ヶ原古戦場全体を見渡しながらか史跡の説明を受けた。

その後1階に戻り、隣の別館レストラン伊吹庵に移動、ガイドも交え「合戦弁当」で昼食を摂った。昼食後は記念館前で写真撮影、その後ガイドを先頭に徒歩約1時間の合戦地めぐり（決戦コース）に出発した。15分ほど歩き「決戦地」に到着、記念碑と幟旗があつて、此所が最も戦いが激しかったところなのだが、静かな佇まいで、昔ここで戦があつたとは信じられないようであった。そこから10分ほど歩き急な上り坂を登り、笹尾山の石田三成陣跡に到着した。展望台があり、そこから石田三成が見たであろう関ヶ原盆地（古琵琶湖跡か？）全景を見渡し当時を偲んだ。石田三成陣跡をあとに、穏やかな田園風景の中の道を

辿り、20 分ほどで「徳川家康最後陣地跡」に着く。家康が桃配山からこの地に陣を移し、全軍の指揮を執った場所で、今は公園になっていて記念碑が建てられていた。見学を終わり、すぐ隣の出発点である古戦場記念館に帰着、ガイトさんにお礼・挨拶をし、探訪会を終了、その後各自帰途に就いた。

寒さの折り、皆様お体を大切にお過ごし下さい。

